

【書評】

松戸宏予著 『日英のフィールド調査から考える学校図書館における 特別支援教育のあり方』

(佛教大学研究叢書、ミネルヴァ書房、2012年)

真城 知己

(千葉大学)

日本のある学校で、購入されたおよそ3000冊もの書籍が実際には配架されずに司書担当によって売却されていたことが昨今報道されていた。

これは学校司書以外の教職員が学校図書館(図書室)にどのような図書が用意されているのかさえ把握できていないような学校が少なくない状況が、これほどまでに規模の大きな事実が何年にもわたって気付かれずにいた背景にあるのだと考えられるが、本書の著者も述べているように学校図書館は危機的状況におかれているといわれている。

特別支援学校の中には、教室不足のために学校図書館自体が(実質的に)存在しない学校も多数存在するほどである。

小学校や中学校等においても、児童生徒全体の学校図書館利用が低迷している中で、特別な支援を受けている児童生徒の場合に、学齢期間中に一度も学校図書館を利用したことがないという子どももいる。

本書は、特別支援教育における学校図書館への視点の欠如の問題を背景に据え、「小・中学校の学校図書館における特別な支援のあり方」について論考したものである。具体的な目的は、「特別な支援の実施に伴う現状の問題点、および特別な支援を進めるうえでの学校司書へのサポート体制を明らかにし、学校図書館における特別な支援の指針について考察する」ことであると記されている。

すなわち、本書は厳密な意味ではイギリス研究というよりも、イギリスの特別ニーズ教育と日本の特別支援教育という二つの制度の下での学校図書館における特別な支援を主題に今後のあり方について、著者の見解が述べられたものである。

両国における実態調査やイギリスにおいて自ら学校図書館職員を対象にした研修機会に参加した経験をふまえた研究成果がまとめられている。

本書の構成は以下のようなものである。

序章 特別支援教育と学校図書館のかかわり——研究の背景と課題——

第1章 諸外国における学校図書館の特別な支援の動向——イギリスの背景を中心に——

第2章 学校図書館における特別な支援に対する意識と現状

第3章 学校図書館に期待される援助の視点

第4章 学校司書による具体的な援助——イギリスと日本の事例調査——

終章 特別な支援に伴う学校図書館の課題と学校司書へのサポート体制

これらに加えて調査票やインタビューの一覧等が資料として巻末に添えられている。

*

序章では、特別支援教育分野、及び学校図書館分野のいずれにおいても、特別な支援にかかわる意識や連携が弱いという問題提起がなされる。そして、学校図書館行政の後退や読書指導の減少などと関連づけた背景の検討が行われている。

第1章では、学校図書館に関わるイギリス、オーストラリア、アメリカ合衆国、及び日本の動向に関わる先行研究を概観するとともに、イギリスのスクール・ライブラリー・サービス (School Library Service) が実施する学校図書館支援の一つである研修事業について特徴が述べられている。イギリスでは統合教育が進められた結果、通常学校の学校図書館に、障害のある生徒の利用を想定した蔵書構成の見直しが求められるようになったことや、学校図書館協議会 (School Library Association) が特別な教育的ニーズに関わる研修講座を毎年実施していることなどが先行研究や自らの研修参加をふまえて紹介されている。

第2章では、複数の質問紙調査をもとに、いくつかの分析がなされている。まず、学校司書と教員が特別な支援の必要要素として考える要因を「個を尊重した配慮」「学習スキルの手だて」等に整理した。そして、多くの学校司書も含めた教職員が特別な支援に肯定的な意識を示す一方で、学校図書館における具体的な手だての不備が指摘された。

学校司書の悩みに関するデータの因子分析によって、その構造が「躊躇感」「拘束感」「不安感」の3要因で構成される仮説を導いている。また、調査対象となった学校司書の約半数が、校内研修に参加できていない実態や、校内において特別な支援の担い手として他の教師から見なされていないという実態が明らかにされた。

第3章は、第2章をふまえて、学校図書館が特別な教育的ニーズのある児童生徒への支援の可能性を日本の学校を対象に面接調査と修正版グランデッド・セオリー・アプローチによる結果の分析を行ったものである。特に、著者のいう教科指導に携わらず課題達成的な面での「評価を担わない職員」としてグループ化されたスクール・カウンセラー、養護教諭及び特別支援教育コーディネーターの役割が重要であるととらえて、彼らを調査対象として面接が行われている。

その結果、回答者の多くが特別な支援の必要な児童生徒とともに学校図書館を利用するようになったことを契機として、彼らによる学校図書館を通じた支援の提供の可能性の認識と、学校司書の役割への認識がなされるようになったと結論づけている。

そして、第4章においてイギリスと日本の学校図書館における特別な支援の比較検討がなされている。調査によって半構造化面接法により特別な教育的ニーズのある児童生徒へのレファレンス・サービス、図書館利用者教育、資料、図書館資源の環境整備の具体的内容を軸に情報収集が行われた。

イギリスのスクール・ライブラリアンへの面接調査からは、彼らが目的意識をもって特別な支

援を行っていることと、スクール・ライブラリアンと学校職員との連携は個人的なつながりであるものの、共通意識としてのLRC (Learning Resource Centre) による特別な支援のとらえ方の特徴を導いている。他方、日本の学校司書を対象にした面接調査からは、「学校司書が学校図書館の日常業務を児童生徒中心の視点で見直して、児童生徒のニーズに沿った工夫や配慮を試行錯誤しながら行っていること、第2にほかの教職員、特に特別支援教育コーディネーターやSC、養護教諭との連携を通して相談を重ねながら、特別な教育的ニーズをもつ児童生徒に対するかかわり方の工夫や、健常児に向けた障害児理解の啓蒙に発展させている点」に特徴があるとしている。この章では、面接調査の結果をふまえて、「学校教職員、特に評価を担わない職員と連携を図りながら、学校司書の日常業務に特別な支援を取り入れる発想をもつこと、既存材料・視聴覚資料を活用する発想をもつことが今後の方向性として導かれた」と結論づけている。

終章では、各章のまとめとして、学校図書館と学校司書が各学校において特別な支援に関わる位置づけを明確にもっていないために、意識の明確な学校司書のいる学校では対応が行われる一方、そうではない学校もあるという現状の問題が指摘される。そして、学校図書館専門職員としての明確な位置づけを求めるとともに、そこに特別な支援の役割を含めることの重要性を指摘している。

本書は、一読した程度では、学校司書が特別な教育的ニーズへの対応の認識を高め、具体的スキルを有するようになるために何が必要かという課題に関する内容が中心に据えられているようにも見えてしまう。それは、各調査の手法や手続きから導かれる結果が、そのような印象を与えているためかも知れない。むしろ、果たして著者が主張する学校図書館と学校司書の位置づけの問題なのであろうかという気にさえさせる質問紙や面接による調査結果が示されているからである。

しかし、特別な支援の提供、あるいは特別な教育的ニーズの視点から学校司書のおかれる状況を見るとき、そこに学校という組織が直面している課題が内包されていることに気がつく。すなわち、学校司書以外の教職員が学校図書館をどのようにとらえているのかという調査からは学校図書館と学校司書に対する認識の希薄さの現状が示されているが、学校図書館が学校内にある有効な資源であるとの認識が深まれば、学校という組織の機能が格段に向上する可能性が拡がることを読み手に訴えてくるのである。

特別な支援は、単にそれを必要とする児童生徒のためだけという発想で提供されてしまうと、それはインクルーシブ教育を目指しているようで、むしろその制度から排除される児童生徒の存在を生み出してしまう構造をもっている。それゆえに、特別な支援の提供は、常に学校全体の機能を高める視点を有していることが重要である（真城知己「図説 特別な教育的ニーズ論——その基礎と応用」文理閣、2003年）。

こうした視点を念頭におくとき、学校図書館と学校司書が、学校の組織において児童生徒の様々な教育的ニーズを包含するシステムに明確な位置づけを持たされていない、もしくは、そのことへの自覚が十分になされないという条件は、学校全体としての機能に不全を生じる構造を有することにつながる要因となる。

本書は、学校司書の学校における組織上の不安定かつ不十分な位置づけに対する問題意識を背

景にしていることもあって、主題である「特別な支援」に関わる枠組みを超えた学校図書館のあり方への言及が拡がりすぎて、得られたデータから検討される論点の本質がかすんでしまう箇所もみられたが、それは著者の学校図書館への思いの強さの表れなのであろう。

特別な教育的ニーズ概念が制度化された1980年代に提起されたイギリスのホール・スクール・アプローチの理念においても、そして日本の特別支援教育においても学校全体での取り組みの重要性が強調されるにも拘わらず、現在まで学校図書館をこの分野での学校内の資源としてほとんど顧みていない組織や制度が多い、逆をいえば、現在の特別支援教育が専門性として視野に含めている学校内の組織や機能が実はとても狭い範囲に留まっているのではないかという大いなる疑問を想起させてくれる書である。

本書が今後の学校図書館と学校司書の役割と位置づけをより発展させる契機をもたらすことを願いたい。